
馬鹿で出来てる創造神

美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿で出来てる創造神

【Nコード】

N4360V

【作者名】

美空

【あらすじ】

神様ってさ、人に土下座していいの？え？だめ？でもさ……私の目の前見てよ。神様が土下座してるんだよ？

神様に誤って殺された、不運な少女、

月乙女颯華 つきおとめそうか のお話です

残酷な描写ありは保険です。きにしないでok。

戦闘描写少ないかもです。そこは妥協をお願いします（殴主人公スベック多いと思われます。

2011年11月22日、第16部を編集しました。

プロローグ（前書き）

プロローグ

……神様って、気高くて神々しくて……

何よりも、尊敬できるって感じるよね？

……でも、今私の目の前に居る神様は……

馬鹿の塊で、おちゃらけてて……尊敬なんかできません、って感じ！
こんな奴を尊敬しろなんてさ、無理だよな。

だってさ、考えてみてよ？

「いやあ、ごめんごめん！」

なんて神様に言われてみ？

「はあ？」

って言っちゃうでしょ！？

宗教馬鹿にしてるわけじゃないよ？

でもさ……うん。

こんな奴、神様でいいの？

って思っちゃうわけですよ。

土下座して平謝りしてるんだよ？

神様がだよ？

「え？」

ってなるよね？

少なくとも私はなった。

で、いい加減教えてくれないかな？

何で神様が私に土下座しながら平謝りしてる理由を、さ。

プロローグ（後書き）

短い……

次は長くしないとなあ……うん。

誤字・脱字等あったらお知らせください。

現状整理

よし、現状整理をしよう。

私は今、何も無い真っ白な空間に居る。

制服を着て。

まず、私は月乙女颯華。

緑桜女学院高等部二年、緑桜学院幼等部の頃から学院に在籍している。

緑桜学園専門寮「赤奏黄寮」寮生、部屋番号567番。

月乙女財閥長女、次期当主

うん、記憶はちゃんとある。

じゃあ、今朝は何をした？

6時に起床して、食堂でご飯を食べて、1時間30分ぐらいパソコンで嫁と会ってた。

7時半に寮を出て、いつも通り校舎へと足を進めた。

で、朝の学活が始まるまで友達と喋ってて、朝の学活が終わって授業を受けた。

放課後になって、集めてる本の新刊が出るから町に出て、本屋が目の前ってところで……

ああ、大型トラックが向かってきて……

「私、死んだんだ……」

改めて現状整理すると、寂しいな……

嫁たちに会えないのが。

今朝、あの子と会ったからいいけど……

はあ。

でも、私が歩いているときにトラックはいなかったと思うんだけどな？

しかも、トラックの運転席に人居なかったし……

じゃあなんで、こっちに向かってきたのかな？

私の馬鹿な頭脳じゃわかんないけどさ……

ん
……

わからん。

てか、本結局買えてないじゃん。

うわ、私哀れ。

いや、死んじやった時点で哀れなんだけど。

なお哀れじゃないか。

……さて、現状整理は終わったのだが。

私の目の前で、土下座して一言も話さないこの人は、

誰なんだい？

神様の謝罪内容

「本っ当にすみませんでした！！！！！」

「何が?！」

うん、訳を教えて欲しいって言ったのは私だよ?

でも、訳を教えて欲しいのであって謝って欲しいわけじゃないんだが……

「謝った訳を話して下さい」

「怒らない?」

何?私が怒るようなことなの?

「場合によっては怒るかも」

「……………取り敢えず、話すね。」

えっと、君は死にました。死因は交通事故です。

それで、その交通事故は……僕の所為です。」

今、何か変な言葉が聞こえたなあ。

交通事故は、コイツの所為?

プチッ

「へえ、君の所為なんだ?……覚悟はできてるよね?

できてなくても、ボコすけど!」

以下、音声だけでお楽しみください

「ギャース!ちよっ、タンマタンマ!関節はそっちには回らない!痛い!ちよ、真面目に!」

痛いって!うわ!骨折れるって!グハア!」

「グハア？気持ち悪っ」

「君の所為だろうが！」

ふーん、私の所為なんだ。

「私を誤って殺したのは誰かなあ？」

「……………僕です。」

「分かってんじゃないの。で、貴方は何者？」

「神です」

「紙ね、分かった。」

「ネ申！」

「神？」

「そう！神様！」

こいつが神様あ？

「うん！僕は創造神！最高位の神だよ！全ての生みの親さ」

がム力つく。

ウザいよ。

「…………私をここに呼んだって事は、何か話したいこともあるんじゃないの？」

「あ、ありますあります！」

「そう、じゃあ手短に10文字以上10文字未満で言いなさい。」

「無理です。」

「即答ですか。」

「はい。」

「…………じゃあ、20文字以上で言いなさい。」

「僕が誤って殺してしまったので、好きな能力をつけて異世界に転生させます。」

「長い。」

「未満は言つてません。」

「言つてないからね…………」

好きな能力をつけて異世界に転生させる、か……

面白そうじゃないの。
行ってもいいかな。
寧ろ行きたい。
よし、行こうか。

神様の謝罪内容（後書き）

短くてすみません。

誤字・脱字等あれば教えてください。

異世界に行こうか！

「転生、ね……なに？赤ちゃんから？」

「そうなるかな。大丈夫、ちゃんと5歳までは記憶消しとくから」

「そう、ならいいわ。」

羞恥プレイは嫌だから、ね。

誰だって嫌でしょ、自我があって記憶もあるのに赤ちゃんの体
験しなきゃいけないなんて。

「……で、能力だけ……」

「そうだなあ、「想像具現化能力」、「神力」かな」

「ま、そんならいならいいでしょ。それから、僕の力の一部を渡す
ね。

一応創造神の力の一部だから、世界史上最強だから。

内容だけど、「身体能力強化」「全知識」「言語」「法則・適正
属性無視」「魔力等無限」かな」

チート能力キタ

!!!!!!!!!!!!!!

「うん、チートじゃないからね。それに、君の体が拒否反応を起こ
さないから

こんな力あげられるんだからね。まあ拒否されても身体いじって
入れるつもりだったけど。

ああ、それからね、「性別操作」「種族操作」「不老不死」「不
老不死操作」も入れといたから。」

「種族操作ってなに？他はわかるけど。」

「ああ、たとえば今、君は人間でしょ？」

それが、念じれば龍族にも獣族にもエルフにも精霊にもなれるっ

て事。

神にはなれないけど、天使・悪魔にはなれるよ。」

「へえ……」

「君の事は神&天使・悪魔に言っておくから。」

「あ、それはご丁寧に。」

「いえいえ。持っていきたい物は？」

持っていきたいものか……たくさんありすぎて困る。

ああ、全部データ入力すりゃぁいいのか。

「パソコンで、ケータイと本の内容を全部入力して。」

「はいはい」

ウザいな。

「したよ。ついでに、僕の知識も入れといたから、全ての事がわかるよ。」

なんですか、この神。私優遇されすぎでしょ。

てか、とかとか好きなの？

「別に好きではないかな、気分？」

「へ、へえ……」

「僕のメールアドレスも入ってるから、いつでも連絡取れるよ。」

「あ、それありがたいかも。」

「そう？」

「うん！」

「じゃあ、落ち着いたらこの扉をくぐってね。行けるからさ、向こうの世界に」

「了解。ねえ、私、5歳になったら捨てられる運命にしておいてくれる？魔力無しでさ」

「ん？ああ、いいよ。そっちの方が動きやすいもんね」

「そういうこと。……じゃあ、行ってくるね」

「行ってらっしゃい。それから……君は、現世で居なかった事
にしておくよ。」

本当にごめん。」

「……有難う。気にしてないよ。またね」

異世界に行こうか！（後書き）

うわ、会話文多い。

人物が3人になれば、台本書きになると思います。

誤字・脱字等あればお知らせください

五歳の誕生日

*****赤ちゃん歴史飛ばします*****

今日は私の五歳の誕生日！父様も母様もお優しい方なんです！

申し遅れました、私はレディウル・ドラグネス。閼属性の八大貴族の一柱です！

通称レルですね。

もういい？いいよね？いやあ、朝、目が覚めたら記憶戻ってるんだもん、吃驚だよね。

まあ神がそうしてくれたんだけど。で、魔力検査があるわけです。

結局家が出るから、お供が欲しい。

探そう。まずは自分の力を見つけて……

……

……？

居た。

「 出て来て、疾風 シルフ 」

疾風は今即興で私が付けた。

異論は認めません

『マスター呼びだしてくださって有難う御座います』

おおう堅苦しい。

「ん。疾風、私の中に居たから私の事は知ってるよね？」

『はい。マスターの持っている情報、力等、私が管理しています。それから、マスターには五時間以上の休息は必要ありません。』

私はまだ未熟なので五時間ですが、慣れれば二、三時間でマスターの疲れをとり、

体調、力等を整える事ができます。』

「わかった、ありがとう」

疾風って……いいなあ。なんか。

くそう、妹に欲しいぜ！

弟は居るのにな。

「姉さん、遊ぼ？」

噂をすればじゃないか。

名前はリディウル・ドラグネス。通称リル。

私の双子の弟。若干シスコンか？

ちなみに魔法属性は闇、火、風と見た！

「いいよ 何して遊ぶ？」

「ん……じゃあさつ鬼ごっこ！」

「鬼ごっこ？いいよ！じゃ、私鬼やるね！」

「うん！」

「いくよー？いーc「レル」母様！」

「これから魔力検査をやるわよ^^
リル、鬼ごっこはまた後でね？」
「はい！」

魔力検査、か……

「父様の書斎でやるから、分かるでしょう？」
先に行ってるわね」
「はい！」

……リルには、言っておこ……

「リル。」

「何？」

「私ね……もうリルと鬼ごっこできないの……」
「……！どうして？」

「私はね、魔力が無いから……だから、多分魔力検査で無いってわかった時に、

追い出されると思うんだ。」

「そんなの、そんなの！やだよ！僕、姉さんと一緒に鬼ごっこやりたい！」

「私もやりたいよ！だからさ……

大きくなって、また会おうよ！その時には強くなってるから！
会って一目でわかるように、これ、持ってたね？絶対だよ！約束だよ！」

「……うん……うん！じゃあ姉さんはこれ持ってた！」
「わかった！……リル、またね！」

リルから貰ったのは、真ん中にダイヤが付いたシンプルなネックレス。

私があげたのは……

『防御魔法陣を組み込んだ同じダイヤのネックレスですね。』
私が作ったんじゃないくて、神様に貰ったヤツ。
いないし。

さ、結果も見えてる魔力検査に行きますか！

《皆さん想像が付くと思うので飛ばします》

いやぁ、予想通りで困るね！

あの両親の顔ときたら（笑）

で、テンプレだところで強力な敵が来てー、王様かギルドマスター
が来てー

拾われて養子になってー、最強になるみたいなの？

『マスター、前方10キロ離れた地点から邪龍族王竜が鬼のような
形相で向かってきています。』

ここで倒しても意味ないから、ぼーっとしてよう。

ぼーっと。

五歳の誕生日（後書き）

中途半端な終わり方ですみません（汗

誤字脱字等あればお知らせください

マスターについて（前書き）

今回は説明と言つことで、短いです

マスターについて

初めまして、マスターのお付き？というかお供？と言うか、取り敢えず精霊、疾風<シルフ>です。

今回は、私がマスターについて説明いたします！（因みに、物語に合わせて編集します！）

名前 ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

旧名 レディウル・ドラグネス 別世界での名前 月乙女颯華

地位 イグヴィウ王国第一王女、第一王子婚約者

種族 天使族・神に最も愛でられし者

家族構成

父・ベルスチア・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
母・レトルーチェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
兄・スチアレーヴェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

誕生年月日 碧耀歴1978年処女月30日

年齢 12歳

能力 想像具現化能力……名前の通り、想像したモノを具現化させる能力です。

るのは無理です。

二次元系も可能です。生物を具現化させ

ただし、物を通してなら可能です（ポ

モン、遊（王等）

神力……魔力、霊力、妖力等を一まとめにした物です。
身体能力強化……説明しなくても解るとおりです。

全知識……創造神が持っている知識の事です。私が管理しています。

言語……別名翻訳能力です。言葉を理解し、話し、書くことができます。

ただ、全知識があるので別に無くても支障はありません。

法則・適正属性無視……術等の法則、属性反応の無視です。

マスターは属性・術・技を気にする

こと無く発動可能です。

魔力等無限……神力の無限です。

性別操作……男・女の切り替えです

種族操作……前話参照です（別に説明が面倒臭いわけじゃないですよ！）

不老不死……説明しなくても解るとおりです

不老不死操作……不老不死を解除することができます。

また、年齢操作もこれに分類されます。マ

スターは現在、

不老を解除しています。

使い魔 邪龍族王竜・王竜長兼魔族長「フィジア」偽名・ループ

（マスターとの契約により、邪龍ではなく、聖龍となりました）

マスターの脳を具現化したような精霊「疾風」＜シルフ＞

道具 マスターの所持品

別世界の情報・好きなアニメ・写真・イラスト等が
詰め込まれたパソコン

マスターの強さ

性格について

この人、疑うって事知ってるの？ってぐらい純粋です。

困ってる人は放って置けないタイプで、皆の妹兼お姉さんって感じです。

また、経験豊富な友達が別世界に居て、話を聞かされていたため、

対処法もバツチリです。

頭腦

IQ2000以上の天才です。

悪知恵も知っていればよく働きますが、悪知恵と言う事を知らないので働きません。

身体能力について

今のマスターが体力テストをやれば、

100メートル走 3秒

握力 平均 500

反復横とび 20秒 1000回

上体起こし30秒
500回

2キ口持久走 50秒

立ち幅跳び 5キ口

シャトルラン(20メートル) 1900回

という結果になります。

公表された内容

名前・ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

誕生日・碧耀歴1978年処女月30日

年齢・5歳

魔力量・九千万（第一王子の最初の魔力が八千五百万）

属性・水、風、土、氷、光、植物、時

使用武器・堰月倫

今公表されている内容

名前・ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

誕生日・碧耀歴1978年処女月30日

年齢・12歳

魔力量・一億五千万（第一王子の現在の魔力が九千五百万）

属性・水、風、土、氷、光、植物、時

使用武器・堰月倫

職業・第一王女・第一王子婚約者、召喚魔術師、フイジオ学園得待生

また、最近ではギルド「天の翼」で、「理を支配せし姫」

という二つ名を掲げて、最強夢双状態ですね。

周りからは「理帝^{リテイ}」って呼ばれているようです。

邪龍族王竜の長に会いました

はい、ぼーっとしてました。

え？だって、ぼーっとしてた方がテンプレ通りの捨てられ貴族じゃん？

邪龍族王竜だったら、ギルドマスターだろうが王様だろうが倒せるでしょww

「……あの、非常に申し上げにくいんですが……あの王竜、邪龍族王竜の長で、その……」

嫌な予感しかないなあ

「

お腹が空いて怒り狂ってるので、めちゃくちゃ強いです

」

嘗めてんの！？

別に倒さなくてよくねww

てか王竜の長とかww

この世界の生物で一番強いじゃんかww

王竜の長って魔族も治めてんじゃん。

「あ、なんかもうすぐ目の前にいる。そこの邪龍くううううん
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

取り敢えず叫ぶ。

「誰だ、貴様は……！？貴様、余程我に喰い殺されたいのか?!」

「誰がwwで、お腹空いてんでしょ？」

「それがなんだ！我は腹が減っている！貴様、我の生贄になればよい！」

「嫌だ そーだ王竜の長君、何が好き？」
話を私がリードすれば私の勝ちさ！
「フン、私の好きなものなど、

……カレーに決まってるだろうが！」
あ……カレーなのねww
「カレー？カレーなら作れるよ？
ちよっと待ってね。」

じゃ、この世界で初めて能力使いますww

「はい、カレー。言ってくればもつと出せるから。」

なんか王竜の長、フリーズしてるけど。

『そりゃ、目の前で創造能力使ったら誰だってそうなりますって!』
そうなの？

ハッハッハッ

気にしない気にしない

「食べないの？」

「食うに決まってるだろうが!」

20分後

「ホントにお腹空いてたんだねえ、王竜の長君？まさか大盛り100皿食べるなんてww」

「悪いか？それから、我はフィジア。なにが王竜の長君だ。」

確かに王竜の長だが、我にはちゃんと名前がある!」

「フィジア？」

『邪龍族王竜、王竜の長兼魔族長魔王、フィジア。』

その性格は破天荒で兄貴分。そのため部下からは慕われる。

過去も現在も使い魔にされた事はなく、その理由はフィジアが強すぎるため。

また、争いは好まないが、空腹になると暴れまくって取り敢えず何か食べようとする。

好物はカレーで、嫌いなものはフェンリルの肉の煮込み。

魔力量は1000京、属性は火、風、水、土、雷、氷、闇、光、王。

ちなみに、本気で怒るとカレーを食べないと怒りが沈む事が無い。人化すると、憎まれの対象どころか敗北感がドドツと訪れるほどのイケメンになる。

竜としての年齢は軽く250歳。だが、人間としては14歳。

っっていうのがフィジアの情報ですね』

何このチートww

この世界の平均魔力量って五千万でしょww

人間で一番多いのがギルドマスターの五億でしょ？

どんだけなのww

フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。(前書き)

戦闘描写あります。

ですが、私は戦闘描写が苦手なので、グダグダになります。

一応結果はサブタイトルに書いてあるので、

この話はスルーして頂いて結構です

フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。

「お主、名を申せ。」

あ、貴様じゃなくなった。

「どうして？」

「精霊は連れてるしカレーは一瞬で出すし我を前にしても怯える事なく話している。

何者だ？」

ふんふん、要するに私の事が知りたいと。

「ま、いいでしょ。私の名前はレディウル・ドラグネス。」

「！？闇の貴族筆頭ではないか！何故、その令嬢がこんなところにいる？！」

「いやあ、貴族が面倒臭かったからね？魔力流せって言われても流さなかったんですよ。」

長くなるので割愛。

（小説って便利だね！）（マスター言っちゃだめです！）

「フム……俄かには信じられないんだがな。

実際にその能力を見せてもらったわけだし。」

『疑問に思うなら、マスターと戦えばいいじゃないですか？』

おいしいiiiiiiiiiiii！？

何故そうなる？！

「その手があったか！」

納得すんな！

「……で、結局やるのね……」

「ウム！早く用意しろ！我は早く戦いたくてウズウズしているんだ

「！」

「はいはい。」

戦闘狂ですかい！？

『じゃ、始め！』

「超電磁砲って、知ってる？」

「……は？」

やっぱり知らないよね～

知ってたら怖いよ（笑）

「こっこの、だよ？」

コインを創造して、電気を纏わせて……っと

1・2・3

「せーのっ」

はい、デコピンで飛ばします

『マスター、結構楽しんでません？』

あれー、幻聴が聞こえるなあ

「ちょ、速いって！」

あれ、キャラ崩壊？

じゃ、続けて、

「私の一番新しい相棒、出してあげるよ」

はい、ポ モンですな。

私の一番新しい相棒は、感ランクルスなんだな

「感。サイコネシスでよろしく」

いやね、確かに楽しんでるよ？

5歳の子供が王竜、しかもその長を倒したら凄いじゃん？

「うわっえ、ちよっタンマタンマ！」

「いやだ。じゃ、こっからは自分の力でいきますかね！梅ヶ枝！」

ルコムの空の 跡の主人公の武器ですね！。

できるかね？

「奥義……太極輪！」

おっ、出来た出来た

あれ、もう終わり？

フィジアって……

「我が弱いんじゃないく、お主が強すぎるんだからな！」

「はいはい。あ、そうだ。私と使い魔契約、してくれない？」

「なんで」

「え？だって、移動手段はあったほうがいいし、使い魔が居ると何かと便利でしょう？」

『……私じゃ、不満なんですかね、マスターは……』

あ、疾風の性格ネガティブに設定してたの忘れてた。

フォローに困るよね、ネガティブは。

ま、私が設定したの私だから文句は言えないけどさ。

「そんなことないよ？私、疾風が居てくれて凄い助かってるよ？」

『（パアアアアア）本当ですか！？有難うございます！』

単純

でも、疾風が居なくなったら、私鬱状態になるかも（笑）

「で、結局どうするの？」

「……いいだろう、

我、王竜、魔族を治めしフィジア也。

この者、レディウル・ドラグネスとの契約を求めん。

契約するならば、右手を挙げよ。

我は汝と共に生涯を共にし、

我は汝と共に苦難を乗り越える覚悟がきている。

……汝、レディウル・ドラグネスに、契約を求める。」

右手を挙げて……

「我、レディウル・ドラグネス。

このモノ、フィジアとの契約を承諾する。」

あーもう堅い。

堅っ苦しいなあもう！

「我の瞳に魔力を流せ。」

「うい」

瞳に魔力を流して……

お？人化した！

なんだこのイケメソ！

14歳くらい？

『人化したのは久しぶりだな……』

「じゃ、これからよろしくね！

フィジア！」

『ウム。こちらこそよろしく頼むぞ。レディウル。』

「あ、レルでいいよ。で、フィジアの偽名考えないとね……その口調も直すこと！」

『ど、努力する』

「ん 疾風、何がいいかな？」

『フィジアさんのですよね？』

てなわけで、疾風と話し合い！

10分後

「『決まったよー！／決まりましたー！』」

「発表しまーす！」

『フィジアさんの偽名は、』

「『ループだよ！／です！』」

意味はない！

うん、意味はないよ！

『ループ？わーん？！』俺はこれからループと名乗ればいいのか？」

「そう！」

『ループ……わかった。』

ドラグネス家に捨てられた今日、
新たな仲間が加わりました

世界観についての説明です！

世界名 「デジタルベイスト」

管理者名 上位神・第36位魔術を司りし神筆頭補佐・イグニル

科学ではなく、魔法が発達した世界。

また、この世界は一つの大陸しかなく、その一つの大陸が一つの国である。

魔法属性 「基本属性」火、水、土、風、雷、氷

「対極属性」光、闇

「特殊属性」植物、時

魔法階級 弱い順から 初級 家事用、軽い模擬戦等で多く使われる。誰でも可能。

中級 学院で習うか、魔導書で覚えられ

る範囲。誰でも可能

上級 学院で習うか、使い魔に教えても

らうか。誰でも可能

最上級 魔導書を解析するか、使い魔に習

うか。努力すれば可能

究極級 研究所に行つて魔導書を解析。S

SSランク以上なら可能

天級 最上級の使い魔に習う。Rランク

が使用可能

古代級 自力で魔導書を解析して頑張るか、

神級の使い魔に習う

帝がなんとか使用可能。

禁忌級 手を出してはいけない階級。ファイ

ジアは全然オツケー。

らかの犠牲を伴う。

魔導書が出されていないうえ、何
人間で現在使えるのはレルのみ。

疾風も何気に使える。

天滅級 上に同じ
神滅級 上に同じ

使い魔階級 弱い順から 下級 属性獣、またその子供

中級 竜の子供、精霊の子供

上級 竜、霊獣、精霊

最上級 属性神の子供、精霊王達、獣王、

王竜、神獣

神級 属性神、神獣王、フィジア、疾風

国名 「イグヴィウ」

王の名前「ベルスチア・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ」

憲法 第一条 奴隷は一切禁ずる。

第二条 12歳〜38歳は学園に通う。

第三条 無闇な争いはしないこと。

第四条 先祖、両親を敬う。

第五条 何が何でも感謝の気持ちだけは忘れないこと。

ギルド 「息吹」

唯一のギルド。

ランク 下から E、D、C、B、A、A A、A A A、S、S S、
S S S、X、X X、X X X、J、R、H、G、R H、R G

帝 火帝、水帝、土帝、風帝、雷帝、氷帝、光帝、闇帝、植帝、時
帝。

全員RHランクで、時帝はギルドマスターが務めている。

火帝がそろそろ辞め時なお年頃。

使い魔は全員属性神の子供。

火帝、土帝、雷帝、闇帝、時帝は男。

水帝、風帝、氷帝、光帝、植帝は女。

七大貴族 火の「フレア家」、水の「アクア家」、土の「ガイア家」、風の「フィル家」

光の「メーバ家」闇の「ドラグネス家」は国民から慕われ、

国からも絶大な信頼を寄せられている。

ただ、闇の「ドラグネス家」が長女を捨てた事は、貴族、国民は知らない。

雷の「ボルト家」は極悪非道、傲慢、無駄に権力を使うので

国民から嫌われていて、国からも信頼されていない。

氷は王族が担っている

学院 「フイジオ学院」

初等部から高等部まである、エスカレーター式の学院。入る物拒まずの学院で、人気がある。

国民が（貴族含む）入りたがるのは専ら此处。

「デレス学院」

初等部から高等部まである、エスカレーター式の学院。入る物を選び、それも実力があっても上位貴族だけしか入れさせない。

そのため人気が無く、入りたがるのは大体「ボルト家」とそ

の血縁ぐらい。

学園に通う年齢は、12歳から38歳まで。

12歳～20歳：初等部

21歳～30歳：中等部

31歳～38歳：高等部

因みに、一番難しい問題でも、日本の中学三年生の問題ぐらい。

碧耀歴 「イグヴィウ」第一の王が定めた年月の数え方。一年が390日。

寿命は男女ともに200歳前後

月 別世界とは違い、十三の月がある。

一月：白羊月

二月：金牛月

三月：双児月

四月：巨蟹月

五月：獅子月

六月：処女月

七月：天秤月

八月：天蝎月

九月：人馬月

十月：磨羯月

十一月：宝瓶月

十二月：双鱼月

十二月：蛇使月。

曜日、お金は別世界と同じなので割愛

世界観についての説明です！（後書き）

訂正する可能性があります。

半分強制（前書き）

今回は、限りなく。恐ろしく。短いです。
そして、終わりが中途半端です。

半分強制

「うわあああああああつつつつつ！！！！！？？？」

幻聴が聞こえる。

声からして、十歳前後。で、男子。

少なくとも、今の私よりは年上だね。

で、声は聞こえたけど助けには行かない。

え？五月蠅いな、私は平凡がいいんです、王族とかに拾われても良
いけど影の最強になつて

さりげなく世界に影響を及ぼすような感じがいいんです。

『マスター、その時点で平凡じゃないですよ？』

疾風、そこはつつこんじゃいけません。

とにかく！私は！めんどくさい事は嫌なんだ！
と言う訳で……

「聞こえないふり。」

『声に出てますよ？』

『レルよ、行かぬのか』

……なんだよ、そのジト目は。

私は何も聞いてないんだよ。

見ざる言わざる聞かざる！

フラグには手をつけないんだ！

『…………（ジト目）』

『(ジト目)』

.....

「あーもう！行けばいいんでしょう、行けば！？」

『さすがマスター！』

『では、行くでしょうか』

何がさすがだ何が！

半分強制だろうが！

「どうなっても知らないからね！出てといで、聖夜！（トゲキッス）

」

『声がしたのは南南西に五百メートル、です』

「だってさ。聖夜、声を辿って。」

【了解】

..... あ、ポケモンと会話可能なのね。

第一王子（前書き）

短いです。中途半端です。

第一王子

……さてさて、半強制的にこちらに来たわけですが。

別にそこまで騒ぐ必要無くな？って言う感じの、それはそれは勇ましい大狼が居る訳です。

『そう思うのはマスターだけですょ？使い魔階級で言えば中級。魔獣階級で言えばBランクです。』

「これが？」

だめだ、ループと戦って？から、感覚が鈍ってる。

『それでは、俺が化け物みたいではないか。』

『？違うんですか？』

「違うの？ってか、心読むなっつの！」

『『声に出てました／出てたぞ？』』

／（。□／）（／□。）／

「さーで、男の子？を助けに行こうか！」

『話逸らしましたね！？』

『む……』

気にしない気にしない

「あ、いたいたー。」

さてと、演技でも開始しましょうかね

「君、大丈夫？」

？「……っ、」

「意識はあるね 名前は？」

？「…… スチアレーヴェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィ
ウ……」（以下、レ）

王族キタ

！

しかも！第一王子！てことは…… 八歳？

助けなければ不敬罪！？ ww

「記憶もあるか……じゃあ、どうしてこんなところに居たの？」

レ「……… / / / /（プイッ）」

「？」

『マスター、深く追求しないであげてください。』

『ああ、このくらいの年頃なら仕方ないだろう』

……？

ああ、解った解った！

冒険ね！

「……一人で帰れる？」

レ「……無理。立てない」

……痛めたか……

仕方ない、送ってくしかない。

それにしてもこの王子っ

可愛い！何この子！？完璧なる男の娘っ！

「じゃあ、送ってくよ！何処まで？」

レ「……王宮。門の前でいい。」

「了解！じゃ、行こう？えと、」

レ「……ああ、レーヴェでいい。……お前は」

「あ……、レディウル・ドラグネス。」

レ「……ドラグネス家の者が、なぜここに居る……？」

へえ、もう七大貴族とかの事習ってた？そりゃそうだね、第一王子であるレーヴェは。

正統王位継承者、だしね。
大狼が警戒、強めてきた。
早く行かないと。

「……私、捨てられたからさww貴族って、力第一主義じゃない？
で、そんなところが嫌になってきたから。魔力流せって言われて
も、流さなかったの。」

そしたら、

「我がドラグネス家に恥をかかせるな！この魔力無し！今すぐこ
の家を出て行け！」

って言われたから、出てきた あ、好きな風に呼んでくれて構わ
ないよ」

『（マスター、演技忘れてます。）』

レ「……そうか。取り敢えず、王宮まで頼むぞ、レイ。」

「レイ？まあいいか、はいよっ！任せて 眠（ネムリ・種族スリー
パー）！」

眠【……】

……眠そんな顔してんな、コイツ。

もちつとシャキツとしろやシャキツと！

……なんて言った無駄だよね、コイツだもん。

あ、今の何気に失礼だったww

「さて！レーヴェ、王宮を想い浮かべてね？」

レ「え？あ、ああ。」

「眠、《テレポート》」

さてと。

やっとこの森から抜け出せた！

なんか後ろからくウォーン>って聞こえるけど気にしない気にしな
い。

気にしたら負け負け。

王宮って、やっぱり豪華なのかな？取り敢えず、着いたら拝んどこ

う
か。

謁見準備

私は今、侍女さんに、無駄に大きいお風呂に入れられています。
無理矢理。お風呂位、自分で入れます。

「あの、本当に大丈夫ですから。」

「ダメですよ、レイ様っ！」

「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」

「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さいっ！」

「……解りました」

……何気に？レイ？定着してるし。

どんだけ凄いんだレーヴェパワー！

『マスター、いいじゃないですか 第一王子に名前を与えて頂いたんですよ！？』

いやいやいや、与えて頂いたんじゃないから。

好きな風に呼んでいいよとは言ったけど、名前くれなんて言っていないから。

『あのですね！この世界で、殿方が女性をあだ名で呼ぶなんて無いんです！』

呼ぶとしたら恋人同士か幼馴染、家族、または夫婦ぐらいです！』

へー、そんなのあるんだ。面倒臭いね。

で？それとこれとで、何の関係があるの？

『マスター、いいですか！？レイ？は、言わば第一王子が考えたあだ名！』

名前を与えて頂いたのと同じです！』

へーふーんほー。はいはい、少し落ち着こうね。

つと、やつと身体、洗い終わったみたいだね。なんか後ろから、

すべすべして洗いがいがあったわ！

うらやましいわ……

なーんて聞こえるけど気にしない気にしない。

「レイ様、お召し物はどれにいたしますか？」

「え？あ、じゃあ……お任せして、宜しいですか？」

「……………はいっ……………！」

不肖ライラ・バルドー！誠心誠意込めて選ばせて頂きます！」

「よろしく願います、ライラさん。」

別にそこまでしなくても良いのに、

『よくありませんっ！』

マスター、もうちょっと自分が客人だという意識を持って下さい

！』

疾風。的確すぎる指摘を有難う。

そうです、私は客人でした。

いやあ、忘れてた忘れてた

ちなみに。

今、服を選んでくれている、元気で少し危なっかしいのがライラ・

バルドー。13歳。

で、「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」が、

お姉さんみたいに優しい雰囲気を持つてる、真面目で頭もよさそう

なのがエル・レイナ。13歳。

「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さいっ！」が、

この三人のまとめ役で、なんと侍女長。ハイナ・エルフィニム。1

5歳。

貴族の方は、学校に行くも行かないも自由らしい。

ただ、跡取りは学校に行かなくてはいけない。

この三人は貴族で、跡取りの妹だから学校に行っていないらしい。

勉強は皆できるみたいだけど。

てか、ハイナさんww

あんただんだけ優秀なんですかww

ラ「レイ様。こちらで宜しいでしょうか？」

「……………可愛い。ライラさん、これがいいです。」

ラ「有難う御座います！では、エルとハイナさん呼んで来ますね。」

ライラさんが持つて着たドレスは、淡い桜色が上からグラデーションになってて、

ドレスのすそには控えめにレースが付いてる。

全体的に、纏まりがあっていい感じ。

柄が裾の方に一つ、大きな蝶があるだけで、柄物が嫌いな私としては嬉しい。

でも。

「私、ピンク系着た事ないんだよね……」

「大丈夫です！絶対似会います！」

「疾風、あんたは何で興奮してるの……」

「興奮してませんよ？」

「してたでしょう。」

え？ループ？

ループなら、客室で待ってるよ？

「レイと疾風、遅いな……」

謁見、大丈夫だろうか？」

心配性なループでした。

謁見 婚約者 養女？

エ「レイ様、これから陛下と謁見して頂きます。

その際ですが、レイ様流の敬意の表し方で結構ですので、

陛下に対して、無礼がないようお願い致します。」

「あ、はい。わかりました。」

私流の敬意の表し方？

じゃあ、向こうで習ったものでいい。ってこと？

てか、五歳児にそんな事要求しないでほしい。

あ、でも演技の事すーすーすーすーっかり忘れてたからいいのかな？

エ「あ、それとですね。レイ様が、殿下と共に、

この城に来る時に乗っていた生物をすぐ出せるようにして頂い

ても宜しいですか？」

……私、何に乗ってきたっけ？

『聖夜です』

そうそう、聖夜だ聖夜。

結局、眠がレポート失敗したから聖夜で来たんだっけ。

「わかりました」

疾風、よく覚えてたね。

凄いや。

『当然です。まだ、一時間前ですよ』

五月蠅いな、私は記憶力だけは無駄にいいけど

どうでもいい事だけは覚ええないの！

エ「では、行きましようか」

「はい！」

この人が王様……

威圧感半端ねえ。

お妃さまは綺麗だなあ……

目の保養になる……

「お初にお目にかかります。」

元、ドラグネス家長女、レディウル・ドラグネスと申します。

この度はお忙しい中、私のような物のために時間を取ってください、ありがとうございます。」

……ああ、嘆かわしい。

何だってこんなこと言わないといけんのさ！

いやね、最低限の礼儀だけどね！？

私は堅いの嫌いなんだよ！

わかる？！

わかんないよね！？

王「そんな堅くなるでない、レイよ。さて、気になる単語が出て来たのだが？」

「……元ドラグネス家長女、ですか？」

王「うむ。今日発表された限りだと、

ドラグネス家には長男、レディウル・ドラグネスしか居ない筈であるが？」

一週間たって、ようやく発表されたんかい！

「はい。私は、そのレディウル・ドラグネスの双子の姉です。

いえ、元、と言った方がいいでしょうか？」

王様もお妃さまも、眉間にしわを寄せないでください。

妃「どういう意味です？」

「私は、魔力が無い、という理由で捨てられました。

まあ、実際にはあります。

それを証明してくれるのが、疾風です。」

妃「疾風？何です、それは」

「私に仕えている精霊です。呼びましょうか？」

えっと、お妃さま？目が爛々と輝いているのはなぜですか？

この目は、「可愛いのかしら！？」って言ってますよ？

妃「お願い」

「わかりました。《疾風。私のところに来て、お妃さまに会って貰うわよ》」

『はい、何でしょうかマスター！』
早いなおい。

「まずは、陛下と妃さまに自己紹介。」

『はい！初めまして、私はマスターの魔力によって出来ています、マスターの精霊疾風です！』

簡潔に述べるとそうなるね。

もう少し詳しく言った方が……

『詳しく言つと、私はマスターの魔力を五歳まで抑え込んでいました！』

強すぎるので、母体にもマスターの身体にも悪影響を及ぼす可能性があつたんで。

私はマスターの魔力その物です。

で、今のマスターの魔力は、あの邪龍族王竜類王竜長よりも多いんです！

なんと、無限なんですね！それに、マスターは何故か天使族なんですよ！

おまけに、邪龍族王竜類王竜長、フィジア、偽名ループを使い魔にしたんです！

しかもです！マスターは、この一週間で神滅魔法まで使えるようになったんです！

もう凄いですよね！ちなみに、マスターの魔力である私も神滅魔法使えます。」

「疾風、最後にさりげなく自慢せんで宜しい。」

『はい、すみませんマスター』

あー、音声遮断結界と暗黒結界張つといてよかった。

大臣とかに聞かれたらただじゃ済まされないからね。

王「その話は本当かね、レイ」

「本当です。」

妃「本当に？」

「はい。何だつたら、今ここで神滅魔法を放つても良いんですよ？

それとも、天使の姿になりましょうか？

それとも、ループを呼びますか？」

王「……いいだろう、その話を信じよう。」

妃「さてと、お礼をするわね。」

王「先程は、アレン……スチアレーヴェを救ってくれて、」

妃「本当にありがとう。礼と言つては何なんだけど、」

王「アレンの婚約者に、」

妃「なつてみない？」

何ですかこの夫婦の以心伝心ぶりと言つか阿吽の呼吸と言つか。

それに、今レーヴェの婚約者？

いや、別に嫌じゃないし寧ろなりたいたいぐらいなんだけど、

「私は、今は身元がはつきりしていません。」

妃「なら、ウチの養女になればいいわ。」

そんな即答しないでください、お妃さま。

反応に困ります。

確かに兄妹婚は認められてますけど。

王「む、いいかもしれん」

王様もそこで納得しないで。

「……宜しいんですか？」

妃「いいわよ？」

王族になる＝世間に注目される？

目立つのは嫌いなんだけど、

まあいいか。

「じゃあ、よろしく願いします。」

あとで、ループに報告つと。

反対はしないと思うけど、取り敢えず報告つと。

あれ？そう言えば、私聖夜出してないぞ？

そして？かどうかは知らんが七年後。（前書き）

短いです。

まあ、はい。

そして？かどうかは知らんが七年後。

「アルファさん、私、学園では護衛必要なんですけど……」
アルファさんとは！

私の専属護衛で、年齢は23歳エリートである！

ア「ですから、レイ様。そういう訳にはいかないんです。」

「だって、護衛が居たら注もk「大丈夫です、貴族も護衛をつけますから。」はあ……」

どうしてそこまでして護衛をつけようとするかな？

なんで？

もしかしたら、レーヴェ兄様かな？

過保護だからなあ、うん。

「……分かりました、分かりましたからこの距離はやめましょう。近すぎます。」

ア「え？あ、す、すみませんっ！」

明日から、学園か……

リルに、逢えるんだね。

「カバンよし。カバンの中身よし。制服も校則を守ってる。こんなもんかな？」

『マスター、学園長との約束の時間まであと30分ですよ？』

「え？あ、《転移》で行けばいいじゃない、任務で行ったことあるんだし」

私は今、世界で最強だと謳われる、ギルド「天の両翼」にて、

「理を支配せし姫」って事で最強状態になってます。無双だぜ

「ルークは、精霊界でも天界でも好きなところに居ていいよ。でも、学園には来ないでね？」

『分かっている。』

魔力が多いから、召喚の方がよくね？ってことで、

学園には？召喚魔術師？として行くんだからね。

下手にルークに出てもらっちゃ困る。

「疾風、あんたは姿隠してなさい。」

『はい、マスター!』

ア「レイ様、失礼しますよ?」

アルファが来た時。そこには、暇を持て余したルークしか部屋に居なかった。

学園長

「学園長室は……っ」と

この学園、無駄に広くね？

こんなに広くなくていいじゃん。

何でこんなに入組んでんの？

「お、みつけ。」

さっすが学園長室、扉も豪華。

無駄に金かけてるね。

「この魔力は……」

アイツか。

よし。

「せーの、どりゃー。」

ドカッ

バキッ

「ふぎゃっ」

ズドオオオオオン

「やる気が感じられませんよ？」

やる気ないもーん

てか、変な声聞こえたんだけど？

幻聴だよね。

空耳だよね。

まさか、

「まさか、

敬語、ウザいよ」

「マスター、それはルアルさんが……；」

「酷いよ——————！！！！！！！！理不尽だ
！」

後ろから叫び声が、横から叫び声に同情する声が聞こえるけど……

気にしない気にしない

ルアルって、今年で何歳になるんだっけ？
なーんか幼稚な気が。

「ルアルさんは、今年で40歳ですよ？」

へえ、未だに独り身とはね……

まあ、でも……学園出て、まで2年しかたってないから……仕方ない、のかな？

自己紹介（前書き）

色々と短いです。

内容薄いです。

それでもいい、と言う方のみどうぞ。

後で、ちゃんと？ここで出てきた人の説明書きますんで。

自己紹介

「俺がこの1年S組の担任、マコト・アラセだ！
俺の給料が減るような事すんなよー？」

(―――)!!

え、何で日本人ネームWWW

後で話聞こう。そうしよう。

あ、でもその前に寮で検索するか。

ま、どっちでもいいっしょ。

「んじゃ、それぞれ自己紹介しろよー」。

名前と属性、攻撃タイプと一言で、簡潔に頼むぞー」

「メール・フレアだ！属性は火と風、攻撃タイプは武器による近距離攻撃！
離攻撃！

七大貴族とか、気にしないでくれよな！」

アランだ。弄るの決定だな。

……こうして見ると、メーバ家とボルト家が居ないんだ。

まあ、メーバは来年入ってくるけど。

リルも、いる。

「クルフィ・アクアです。属性は水と光、攻撃タイプは魔法と弓による魔弓攻撃。

私もアランと同じなので、気にせずに話しかけてくださいね」

「ミュル・ガイアだ。属性は土と氷、攻撃タイプは魔法による遠距離攻撃。

あーまあ、そのなんだ。俺もアランたちと同じなんだが……

俺から情報を買うときは、それなりの対価を持ってこいよ？」

「フィリア・フィル、属性は風と水。攻撃は体術と魔法による近距離か遠距離攻撃。

私もアランたちと同じだ。よろしく。」

・
「リディウル・ドラグネス、です。属性は闇、火、風。攻撃タイプは中距離攻撃。」

えと、僕もアランたちと同じなので、よろしくお願いします。
あと、私事ですが。ココに姉さんが居たら、早く僕の所に来て下さい。

約束、忘れたとは言わせませんから。」

私、そこまで薄情じゃないんだけどなあ。
忘れる訳。ないじゃん。

てか、ほら。皆「え？姉？いないよね？」
って顔してんじゃん。

アランたちはリルから聞かされてたのか、「またか」って顔してるけど。

・
・
・
・
さて、私の番。

「ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウです。
属性は水、風、土、氷、光、植物、時。」

攻撃タイプは召喚又は魔法、武器による全距離攻撃

ここは学舎、身分制度は関係ありません。

なので。仲良くしてくださいね！あ、ベルって呼んでください。」

よし、第一関門クリア。
次は、リルに会うこと。

あ、そういえば何か忘れてる。
なんだっけ？

「ベル様！やっと思つきましたよ！」

「……あ、アルファさん。あ、皆さん、こちらはアルファさんです。」

「え？あ、申し訳ございません。アルファ・スラード、

第一王女専属護衛騎士、攻撃タイプはまあいろいろです。宜しくお願いします。」

因みに。

この後、私はアルファさんからお小言を頂きました。

休み時間

「リル」

「あ、ベル様。どうかしましたか？」

「あー、ダメだ。様は止めようよ様は。ね？」

「ですが……」

「いいんじゃないの？リル。」

「馬鹿は黙ってください。そうですよ。ベルがそう言ってくれたんです。」

……やっぱり、顔と声色変えてるから気がつかないか……

ま、コレで気が付いたらそれはそれで天才なんだけど。

さて、いつ……ばらそうか。

私としては、いつでもいいんだけど。

<疾風。いつがいいと思う？>

<そうですね……リル様が、諦めた時でいいんじゃないでしょうか？>

疾風ナイス。

さて、聖霊にお願いs「リル様はここに居まして？」

……誰だよ、この女。

<……………疾風、検索。>

<了解しました。

ヒットしました。

彼女の名前はリリナ・アンデスレン、闇系統の上級貴族の次女

です。

ギルドランクはB、魔力は五千六百万。属性は闇と雷ですね。性格は最悪のデロデロ、嫉妬心はハンパなく、欲深いです。そして、彼女はリルさんの婚約者の座を狙う人の一人ですね。蛇足ですが、マスターは七大貴族とギルド上層部、あとは白で働いてる者の家族にしか知られていないので、彼女はマスターが姫だということを知りません。>

へえ……色々やってそうだね、この子の家。

<疾風。アンデスレン家について調べて。>
<了解しました。

ヒットしました。

アンデスレン家、裏で奴隷・人身売買、麻薬取引、人攫いをしています。

また、アンデスレン家長女は、レーヴェ様と同学年で、婚約者の座を狙っています。>

やっぱりやってるか……

これは報告だな。

「……リリナか……」

「リル様！ご機嫌麗しく存じますわ。それで、リル様？
答えを聞いても宜しいでしょうか？」

体をくねらせるなああああああ！！！！！！！！！！
そういうことをしていいのは可愛い子なんだよ！わかる？！

「……僕は婚約者を取るつもりはありません。姉さんが見つかるまで。」

「……いえ、見つかったも。僕が結婚する人ぐらい、自分が決めます。」

「……これでリルが婚約者を取らないのは私のせいだと言ったら叩き潰すところだった。」

いやー、危ない危ない。

「……っ。何故ですの？私ではダメなんですの？」

「そうだね。ハッキリ言つと、僕はリリナのこと苦手だ。」

「言うねーリル。でも、あんまハッキリ言っちゃダメだよー？」

「ベル。でも……」

でもないっつーのwww

それにしても、この女。

リルにベタ惚れだなーwww

リルも大変だww

「そうですわ！大体が、貴方は誰なんですの？」

リル様に敬語を使わないなんて……とんだ無礼者ですわね。
不敬罪で訴えても宜しくてよ？

その前に。私の前から消えてくださる？

貴族を前にしてそんな無礼をはたらく平民と一緒に居るなんて、耐えられせんもの。」

出たよ高飛車w w

本物を見ると……腹筋崩壊するなこれw w

「何かいったらいかが？」

「ええ、では言わせてもらうわ。あまりこついうの好きではないんですけどね。」

まずは自己紹介と行きましょう。

私の名前は、ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴイウ。

この国の第一王女です。」

「なっ！？あなた、ふざけるのも大概にしないで！」

第一王女様の名前を名乗るなど……何を考えているんですの？！」

「……証拠を見ますか？私のうなじに、王族の紋章がありますから。」

これでも信じなかったら、コイツ馬鹿だなw w
いや、私が名乗った時点で疑う方が馬鹿か。

「……！本当にありますわ……！では、貴方……本当に第一王女なんですの？！」

「……そう言っただじゃないですか。何ですか？疑いますか？」

てかりル達空気w w

「いえ……！申し訳御座いませんでした……！」

「……では。貴方の名前を聞いても宜しいですね？」

「はい！私は、リリナ・アンデスレンと申します！」

「……アンデスレン？そうですか、貴方が……」

「？どうかなさいましたか？」

「いえ、何でも。では、そろそろクラスに戻ったほうがいいのでは
ありませんか？」

「あ、はいっ！失礼します！」

「ええ。ああ、それから……」（ヒソ）貴方の言え、危ういかもし
れませんよ？

私女優ww

ア デミィ賞取れるでしょww

てか、最後の真っ青な顔ときたらww

この後、私はリルに凄く感謝されました。

「リリナの気を惹いてくださって有難う御座います」
だそうでww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360v/>

馬鹿で出来てる創造神

2011年11月23日12時57分発行